

RDA 11th plenary meeting

参加報告

報告者：南山 泰之（情報・システム研究機構国立極地研究所）

日時：2018年3月21日（水）～23日（金）

場所：Berlin Congress Center（ドイツ、ベルリン）

総会のページ：

<https://www.rd-alliance.org/plenaries/rda-eleventh-plenary-meeting-berlin-germany>

当日のツイート（RDA plenary 全体）：

<https://twitter.com/hashtag/RDAplenary?src=hash&lang=ja>

1. 概要

本総会は、ドイツ研究振興協会（GFZ）、ドイツ研究センターヘルムホルツ協会（HELMHOLZ）及び RDA Europe 主催のもと、3月21日（水）～23日（金）にベルリンで開催された。第11回目となる総会のテーマは”From Data to Knowledge”であり、650人弱が参加し、80を超えるグループによる議論が展開された。以下では、参加したグループにおける議論の様子を報告する。

（オープニングの様子）



2. 各セッションの詳細

2.1 3/21 (水)

2.1.1 IG Earth, space and environmental sciences

<https://www.rd-alliance.org/ig-earth-space-and-environmental-sciences-rda-11th-plenary-meeting>

本 IG は、特定の専門分野にフォーカスしたグループとして、国際学会（AGU、EGU）の存在を背景に設立されている。「データと出版物をどう繋ぐか」という論点につき、主にメタデータ設計に関する議論がなされた。

2.1.2 WG DMP common standards

<https://www.rd-alliance.org/dmp-common-standards-wg-rda-11th-plenary-meeting>

本 WG では、既存のデータ管理計画（DMP）の欠点を洗い出し、1) ワークフローの定義、2) データ管理基盤の構築、3) 標準的なデータモデルの発見、を行うことによって、データ管理計画作成の自動化（Machine-actionable DMPs）を目指している。会議では、ユーザーストーリーの調査や既存の DMP ソフトウェア比較といった検討状況が紹介された。

【ユーザーストーリー】

<https://github.com/RDA-DMP-Common/user-stories/>

【DMP ツールの例】

OpenDMPs: <https://gitlab.eudat.eu/dmp/>

University of Queensland: <https://rdm.uq.edu.au/>

Elixir: <https://www.elixir-europe.org/platforms/tools>

RDMO: <http://rdmorganiser.github.io/>

DMPRoadmap: <https://github.com/dmproadmap>

RedBox: <http://www.redboxresearchdata.com.au/plan.html>

2.1.3 IG RDA/WDS Certification of Digital Repositories

<https://rd-alliance.org/ig-rdawds-certification-digital-repositories-rda-11th-plenary-meeting>

本 IG では、デジタルリポジトリの認証を普及させるためのストーリーや進め方を中心に検討がなされている。2017年9月に設立された CoreTrustSeal の認証を念頭に3点の事例紹介があり、普及に向けた議論が行われた。

CoreTrustSeal: <https://www.coretrustseal.org/>

【事例】

CLARIN: <https://www.clarin.eu/content/checklist-clarin-b-centres>

NASA EOSDIS Distributed Active Archive Centers: <https://earthdata.nasa.gov/about/daacs>

NIH. ImmPORT: <https://import.niaid.nih.gov/home>

2.2 3/22 (木)

2.2.1 IG Education and Training on handling of research data

<https://www.rd-alliance.org/ig-education-and-training-handling-research-data-rda-11th-plenary-meeting>

本 IG では、既存の教材、モジュール、カリキュラム等のリスト作成、及びそのフレームワーク構築を目的としている。事例紹介として以下 5 点の発表があり、実践例としてどう位置付けていくべきか、につき議論がなされた。

【事例】

CESSDA: <https://www.cessda.eu/Research-Infrastructure/Training/Expert-Tour-Guide-on-Data-Management>

EDISON: <http://edison-project.eu/>

EOSCpilot skills framework: <https://eoscipilot.eu/content/eoscipilot-wp7-towards-stewardship-skills-framework-eosc>

DIL: <http://www.datainfolit.org/>

CODATA/RDA schools of research data science: <http://www.codata.org/working-groups/research-data-science-summer-schools>

2.2.2 IG Data Discovery Paradigms

<https://www.rd-alliance.org/data-discovery-paradigms-ig-rda-11th-plenary-meeting>

本 IG では専門分野のデータリポジトリにあるデータの発見可能性について検討しており、自動的なメタデータエンリッチメントを可能にするツールやサービスの開発を目標としている。紹介された検索システムの調査報告書に関する議論のほか、データの粒度に関する議論がなされた。

Search System survey report:

https://figshare.com/articles/Search_System_Survey_Report/6011018/1

2.3 3/23 (金)

2.3.1 IG RDA/CODATA Legal Interoperability

<https://rd-alliance.org/ig-rdacodata-legal-interoperability-rda-11th-plenary-meeting>

※2018年3月現在、当日の発表スライドも上記ページで公開されている。

本 IG では、2016年9月に作成されたガイドラインの実装などを目的としている。

【ガイドライン】

<http://www.codata.org/news/129/62/Legal-Interoperability-of-Research-Data-Principles-and-Implementation-Guidelines>

3件の事例発表を元に、データ公開・共有に係る法的問題（適切なライセンス、法的規制による限界等）につき議論がなされた。

2.3.2 IG Libraries for Research Data

<https://www.rd-alliance.org/ig-libraries-research-data-rda-11th-plenary-meeting>

スライド : <https://goo.gl/EwYhhX>

本 IG は、研究データに関わる図書館の事例をもとに議論を深めることを目的としている。2018年3月に公開されたピッツバーグ大学のプロジェクト報告書についての紹介のほか、各大学・研究機関による3件の事例報告があり、ドメインの研究者との協働、研究データ管理に係る戦略等につき議論がなされた。

【プロジェクト報告書（ピッツバーグ大学）】

Shifting to Data Savvy: The Future of Data Science In Libraries

<http://d-scholarship.pitt.edu/33891/>

3. 所感

報告者は、2016年3月に開催された第7回 RDA 総会（東京）以来2回目の参加である。前回参加時に比べ、全体的に RDA の WG 活動による成果物を実装した事例が現れてきており、RDA の意義はより一層高まりつつある、という印象である。分野を横断した形での国際的な事例報告が集まる稀有な場ということもあり、今後も継続的な情報収集は必須だろう。また、各国のオープンアクセス、オープンサイエンスに関わるキーパーソンも数多く参加しており、国際連携を考える上でも格好の場と言える。JPCOAR としてどのような貢献ができるかを検討しつつ、今後も注目していきたい。

以上